

現代っ子の育つ過程

—発達障害は生まれながらではない¹⁾—

川崎医科大学小児科 片岡直樹

1. 現代っ子の育つ過程

子どもは、大人の常識的な世界とは全く違う世界を持っています。この子どもの世界での体験を踏まえ、子どもは大人になっていきます。言い換えると、大人になるということは、この世の常識とは異なった子どもの世界（ファンタジー）と距離をとりながら、生きていくことかもしれません。子どもの特徴はファンタジー（空想）の世界を持つことなのです。満月の中にうさぎの餅つきを見たり、サンタクロースを信じたり、子どもたちだけの体験ごっこやおとぎ話やイソップ物語の世界です。サンタクロースをいつまで信じていたかが、その幼少期の幸福度を示すバロメーターになるといわれています。それは、「サンタさんがプレゼントを自分に持ってきてくれたんだ」という子どもが信じている物語を含めて、家族ら周りの人たちが子どもを大切に思っていることの証明になるからでしょう。

しかし、その「子どもの世界」自体を否定するような科学的な教育を受けたり、早いうちから「子どもの世界」との接触を断ち切られる子どもも増えています。また、その世界に浸るチャンスを逃がしてしまうこともあります。「子どもの世界」とちゃんと距離をとれるようになるためには、まず、しっかりと、どっぴりとその世界に浸ることが大切です。それが欠けると、子どもとして生きられなかったことになってしまいます。言われたことがちゃんとできても、沢山の知識をいっぱい記憶していても、どんな遊びをしたら楽しいのか、わくわくと心が動か

されるのかわからない子になるかもしれません。

さらに、慄然とすることは、乳児早期から自分以外の人間と意思表示が伝わらない赤ちゃんが増えていることです。

2. 子どもの脳の発達へのテレビ・ビデオの影響

—テレビによる後天的な言葉遅れの事例を中心に—

今、保育園で笑わない赤ちゃんが増えています。多くはすでに生後3～6ヵ月で、表情が乏しく、微笑みが消えています。3～5家庭に1家庭では朝から晩までテレビがつけばなしなのです。そのうち、5～10人に1人の赤ちゃんがコミュニケーション不良を来しています（出生30～50人に1人にあたります）。テレビがついていても、その5倍ぐらいの時間を抱っこしてあやしたり、外へ連れ出したりと応答的環境が十分確保できれば問題は発生しません。養育者は、彼らが1～3歳になると、他者とのコミュニケーションがとれないことに気付いたり、乳幼児健診時に発達の遅れを指摘されたりし、専門機関へ紹介されると、コミュニケーション障害と診断されます。その診断、治療に戸惑う養育者が、インターネット、新聞、雑誌などで著者の本^{2),3)}に出会うと、直ちにテレビ・ビデオを消して、川崎医科大学小児科へ連絡してきます。全国各地からやってくる2～3歳のコミュニケーション障害児は2,000名を超えています。最近4年間は、来院時、患児の生い立ちの生活

記録ビデオを持参してもらっており、現在、約400人分のビデオが手元にあります。今回、言葉が出ないコミュニケーション障害を、重いものから軽いものに分け、その典型例を実況解説します。

【症例1】2歳2ヵ月，男児

初診：表情（-）指さし（-）まね（-）指示（-）視線（-）

生後、テレビがつけばなしだった。生後4ヵ月、テレビの前で手足をバタバタ打ち鳴らし、テレビに向かって「キャッキョッキョ」と声を出す。1歳3ヵ月の映像では、父がテレビの方へ目を向けながら哺乳瓶で授乳し、患児は父が見ている反対側のもうひとつのテレビを見ながら飲んでいる。1歳11ヵ月の映像では、表情がなく、凍りつくような目つきでテレビの方を見ながらジャングルジムの上方で一人で遊んでいる。親が呼びかけても振り向かない。発声はない。初診の2歳2ヵ月からテレビを禁止し、家族が丁寧に関わったところ、3歳でごっこ遊びができ、母親の指示に応じて洗濯物を干すなどの行動を見せ始めた。3歳半で、かん高い声ではあるが、伝わる単語が10個ほど出てきた。対人関係が育ち、感情表現が豊かになっている。5歳現在、会話が可能になり、友達と楽しく遊べるまで回復した。

【症例2】2歳9ヵ月，男児

初診：表情（+）指さし（-）まね（-）指示（-）

生後、テレビがつけばなしだった。生後2ヵ月から英語教材の音を聞かせ続けた。1歳時、父と笑い合っているが、言葉はない。1歳半、英語教材の音声をまねて、「ガッガッ」と発声するが、意味のない吠え声でしかない。2歳半、自閉症と診断され、生涯治らないといわれ、養育者はショックで立ち上がれなかったという。初診の2歳9ヵ月以後、音の出るものをすべて禁止し、じゃれあって関わるよう指導する。3歳時、まね言葉ながら、「パパ、イッ

チャッタ」「ニューニュー、オイシイ」など話し言葉が出た。3歳9ヵ月から幼稚園へ通い出し、伝わる言葉が増えた。5歳半の現在、冗談を言って家族を笑わせるほどに成長した。

【症例3】1歳9ヵ月，男児

初診：表情（+）指さし（+）まね（+）指示（+）視線（+）

生後、テレビがつけばなしだった。1歳半の映像では表情豊かで、「おつむてん」などの指示に年齢相応の反応をしている。しかし、祖父や父と積み木遊びをしている背後にテレビの音があり、テレビのつけばなしが日常であったことが容易にわかる。母親が絵本を読み聞かせている場面では、指さしができるのに全く声が出ず、無声のままであった。一方、テレビの音楽場面では楽しそうに「キャッキョッキョ」と大声を出している。初診を機にテレビ、ビデオ、CD、電子おもちゃを禁止した。2歳時、自分で本をめくりながら、母の声を真似して、「アアアアア」と声を出している。3歳の誕生日の映像では、お寿司の具を指さして患児が「これなに」と聞くと「しいたけ」と母親が答えている。すると、すかさず患児は、「しいたけは、いらん」と自分の言葉でニコニコしながら言っている。3歳半には、砂場のままごと遊びで、父親と普通の会話ができるようにまで成長している。

症例1は親に全く懐かず、言語理解も言葉もない重いタイプ。症例2は親に懐いているが、言葉の理解が悪い受容性言葉遅れのタイプ。症例3は親の言うことは何でも理解できるが、言葉だけが出ない表出性言葉遅れの軽いタイプです⁴⁾。重いものを1とすれば、軽いものは10。すなわち重いものが100人～200人に1人、軽いものは10～20人に1人ぐらい見つかる想定しています。

《乳幼児のコミュニケーション障害はなぜ後天

的に起こるのでしょうか》⁵⁾

人間は生まれた時、神経細胞（ニューロン）はほぼ出来上がっていて、生後は数が増えませんが、すなわち、人間の資質は出生時に完成しているけれども、うまく育てられなければ、人間らしく育ちません。生後赤ちゃんの頭がどんどん大きくなるのは、神経細胞間のネットワーク（神経線維の接点をシナプスという）が外界からの刺激によって作られるためです。赤ちゃんは視覚も聴覚も触覚も急速に発達します。その刺激は感覚を受け取る神経細胞に伝えられ、神経線維によって更に次々と他の神経細胞に伝えられ、ついには目を動かす、声を出すという行為になります。たくさん体験する程、シナプスがたくさん出来て、ネットワークは密になります。五感の基本的な発達には生後最も早く、3～4ヵ月で出来上り、運動は数ヵ月、そして総合的に言葉が2～3歳で育ちます。生直後から言葉が出るまでの時期、赤ちゃんが心を通わせる3つの原則があります⁶⁾。

① 赤ちゃんの言動にオウム返しで答える。

赤ちゃんの育ちに対する手助けの中で、オウム返しほど重要かつ多彩なものはない。赤ちゃんの出す声、動き、ものを見るパターンを真似てみる。そうすると母親は、本来なら赤ちゃんに接する際に不必要な無駄な言葉や動きを、自然に捨て去ることができる。つまり、赤ちゃんの表現を真似ることで、乳児の心の動きがより明確に実感できるわけで、交流の質を高めることができる。やがて、あなたの言動の真似ができるようになる。あなたが赤ちゃんを真似て笑ったり、眉をひそめたり、声を出すのを見ながら、赤ちゃんはこうした動作にはみんな意味があって、他人にメッセージを送るときに使えることを学ぶ。生後3～4ヵ月の出来事である。

② ストレスに強くなるための“静かさ”の使い方を学ぶ。

赤ちゃんはあなたの突然の挨拶「おはよう」

にびっくりする。しばらくの間、静かに見守っておれば、次にあなたがほほ笑んでみせた時には、落ち着きを取り戻している。そして、赤ちゃんの興味を引くため、目くばせを始める頃には、あなたの笑顔はすっかり受け入れられているであろう。外界から入ってくる視覚的なもの、音、動き、身振りなどの刺激によって、赤ちゃんは一旦心のバランスを崩される。しかし、こうした一時的な混乱自体は、赤ちゃんにとってむしろ有益なものだ。赤ちゃんは混乱するたびに、自分には平静を取り戻す能力があることを体験していく。次にもっと大きな混乱に直面したときには、ずっと楽にバランスを保てるようになる。その“静かさ”が赤ちゃんの精神活動を高める理由は、歯車を噛み合わせようと努力している赤ちゃんに、それに集中させる時間を与えるからである。乳児の恒常性機能そのものである。

③ 周囲の雑音を消す。

親子の絆を増幅させるシステムは、“静かさ”が日々の生活のスタイルとリズムとなってこそ、機能するようになってきている。近代国家の生活では、テレビ、ビデオ、CD、ゲーム、電子おもちゃなど音を発するものがおびただしく入り込んでいる。こうした“音”の浸透が、赤ちゃんとおとなと親をつなぐ本質的なシステムを壊してしまうことを、著者は実証している。先進国家は、調和の取れた親子なら誰でも持っているはずのテレパシーに近いコミュニケーションの感覚を失ってしまっている。出生前の子宮の中がそうであったように、赤ちゃんは静かな環境を好む。親にとっては少し辛いかもしれないが、その代償に得られる“静かさ”が、親子の交流に与えてくれる豊かさや満足感は計り知れないものだから。

テレビ（映像と音）がついていると、赤ちゃんの心が育ちません。乳幼児のコミュニケーション障害は、テレビ環境の中でなぜ後天的に起こるのかについて、その発症要因を3点述べます⁷⁾。

① 応答的環境がないと、自己認識の発達不全が起こる。一心の理論が育たない

生直後は強く泣くか長く泣くかしか自分の意思表示ができない。1ヵ月もすると泣き方を変える。空腹を感じて泣くという意味を伴った行為に、母親がおっぱいを含ませながらあやす。満足して泣き止む。ところが、機械的に3時間ごとにミルクを与えたり、泣いてもあやさなかったりすると赤ちゃんは泣くことをやめる。意思が通じないと「自分の確認」ができず、他人の心を読めなくなる。

② テレビの直接的影響—空間認知が育たない

テレビは二次元の世界であるので、片眼でも見える。目が2つ、耳が2つの機能が育たない。立体的なもの、移動するもの、相対的な動的関係が理解できない。動くものやボール遊びが苦手。遠近感がわからない。指差しができない。きき耳が育たない。

③ 実体験が不足すると、シンボル化能力が育たない—デジタル認識

五感を使った無意識の体験が具体的概念をつくる。赤ちゃんは実体験を重ねることで、ワンワンとニャンニャンを1～2歳で区別する。カードや絵本で教えられる行為はデジタル認識になる。カードで覚えるワンワンとニャンニャンは「知識」として記憶するだけで、現場で本物の犬と猫を区別できない。無意識の理解が育っていない2～3歳でひらがな、数字、アルファベットなどを覚えたりパズル遊びもデジタル認識になる。デジタル育児よりアナログ育児が大切である。アナログ育児は、考える脳を育て、発想力や創造性の源になる。

《考察》

サーゲイ・サンガー氏（「乳児はなんでも知っている」著）⁶⁾は、20年前赤ちゃんの行動を、ビデオ記録と心臓鼓動音の測定によって分

析し、赤ちゃんの一生は生後12ヵ月の育て方で決まると述べています。テレビ、ラジオ、ビデオなど“音”を発するものが親子の絆を阻害しているといいます。また、脳科学者の久保田競氏は、平成19年9月、著書「赤ちゃんの脳を育む本」⁸⁾の中で、見る、聞く、触れる、味わう、臭うといった感覚野や運動野の脳内回路は乳児期急速に発達し、人間性の基本的能力の大部分は1歳ぐらいに出来上がると記述し、寝かせっぱなしにしたり、テレビ、ビデオを何時間も見せておくと、喋れない子になることを警告しています。

著者は、30年前、乳幼児に対するテレビ環境の悪影響に気付き、臨床研究を行っています。最近4年間は、出生後より家庭ビデオに録画された映像と、コミュニケーション障害の診断後回復する過程の映像を集積し、発症原因とその対応を明らかにしています⁷⁾。小児のコミュニケーション障害は決して生まれながらの患児自身の問題ではなく、後天性で予防が可能な、国家をおびやかす重大な出来事です。重いものは100人に1人、軽いものはその数倍発生しています⁹⁾。

平成19年10月 American Academy of Pediatrics は、出生後2年間に全ての出生児の自閉症スペクトラム障害スクリーニング検査（M-CHAT）を推奨しているとロイター通信情報は伝えています¹⁰⁾。新しいガイドラインとして、笑わない、目を合わせない、片言を言わない、身振りが無い、呼んでも振り向かないなどの微妙な徴候を観察するよう小児科医に求め、早期介入、早期治療が大切なことを謳っています。後天性かつメディアなど“音”“映像”環境には一言も触れてなかったのが誠に残念です。発症要因が不明なまま、多くのコミュニケーション不良を見つけて、何を管理しようというのでしょうか。現場では混乱するだけです。

テレビによる後天的な言葉遅れの治療について述べます⁷⁾。テレビ、ビデオ、CD、BGM、電子おもちゃなどを除くだけでは決して良くなりません。赤ちゃんの意思表示、意欲、活動性、

愛着、五感、運動能力などが未発達のままであることにまず気付くことが重要です。基本的には育て直しをすることです。Bowlby J. の「愛着」が育つ過程を再現するのです¹¹⁾。対人関係が育っていない赤ちゃんは「イナイイナイバー」から始めます。ちょうど生後6ヵ月の頃です。

1歳で見つかれば、生後6ヵ月に戻るのは簡単ですが、3歳で見つかる大変苦労します。言葉が表現できない上に、自己主張だけは一人前だからです。

乳幼児に対する行動療法（TEACCH など）

は極めて危険であると言わざるを得ません。愛着が育つことと、子どもに指示して教え込むことは相反することです。赤ちゃんが他者と心を通わせる人生の始まりの時期に、大人がやるべきことは赤ちゃんの言動にオウム返して応えることです。模倣するのが大切な時、単なる“記憶”の蓄積であるデジタル的育児では、赤ちゃんは心を通わせることを諦めます。

今、賢いコミュニケーション障害児が増加していることを大人は真摯に受け止めなければなりません。

《文献》

- 1) 片岡直樹、田澤雄作：公開講座「メディアと育児環境—子どもの身体と心が危ない！」未熟児新生児誌 19：110-113, 2007
- 2) 片岡直樹：テレビ・ビデオが子どもの心を破壊している！東京，メタモル出版，2001
- 3) 片岡直樹：しゃべらない子どもたち笑わない子どもたち遊べない子どもたち，東京，メタモル出版，2003
- 4) 片岡直樹：新しいタイプの言葉遅れの子どもたち，日児誌 106：1535-1539, 2002
- 5) 無量真見：自閉症の意識構造—デジタル文化が無意識の成長を阻害する，東京，現代書館，2005, pp 60-110
- 6) サーゲイ・サンガー：乳児はなんでも知っている，東京，祥伝社，1987, pp 63-91
- 7) 片岡直樹：子どもの脳の発達へのテレビ・ビデオの影響，Brain Medical 18：272-278, 2006
- 8) 久保田競：赤ちゃんの脳を育む本，東京，主婦の友社，2007
- 9) 片岡直樹：テレビ・ビデオの長時間視聴やテレビゲームと軽度発達障害とは関係がありますか？小児内科 39：213-214, 2007
- 10) Myers SM, Johnson CP：Management of Children With Autism Spectrum Disorders. Pediatrics 120：1162-1182, 2007
- 11) Bowlby J：母と子のアタッチメント—心の安全基地，東京，医歯薬出版，1993

【プロフィール】

川崎医科大学 小児科
片岡直樹 (かたおかなおき)
昭和17年5月19生まれ



《略歴》

昭和36年 松山東高校卒業
昭和42年 岡山大学医学部卒業
昭和49年 川崎医科大学小児科 講師
昭和55年 同 助教授
平成7年6月 同 教授
平成20年4月 川崎医科大学名誉教授
平成20年4月 Kids 21 子育て研究所設立

《学会活動》

日本小児科学会評議員
日本小児保健学会評議員
日本新生児学会評議員
日本小児心身医学会評議員
こどもの生活環境改善委員会専門委員
倉敷小児科専門医会会長

《参考著書》

- ◆『テレビ・ビデオが子どもの心を破壊している!』 メタモル出版 2001
- ◆『しゃべらない子どもたち 笑わない子どもたち 遊べない子どもたち』
メタモル出版 2003
- ◆「乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です」
『日本小児科学会雑誌』 108巻4号 p709-712 2004
- ◆「新しいタイプの言葉遅れの子どもたち」
-長時間のテレビ・ビデオ視聴の影響-
『日本小児科学会雑誌』 106巻10号 p1535-1539 2002

《連絡先》

〒701-1334 岡山市高松原古才497-16 TEL 086-287-2550 FAX 086-287-9275
Email: nkataoka@mist.ocn.ne.jp
http://www.okayama-ikiiki-shiawase.net/kids21.html

医療法人 鶴風会 社会福祉法人 鶴風会

Kids21 子育て研究所

～ Key Words ～
テレビ視聴・言葉遅れ・コミュニケーション障害・発達障害
"音"と"映像"環境(テレビ,ビデオ,CD,電子おもちゃ,コンピュータゲーム,携帯
電話,早期教育ビデオ,BGM,メロゾーランド)

《お問い合わせ》

所長 片岡 直樹 (かたおき なおき)
〒701-1334 岡山県岡山市高松原古才 497-16
TEL:086-287-2550 FAX:086-287-9275
http://www.okayama-ikiiki-shiawase.net/kids21.html